

2018年  
7月号

## “ありのまま”で居れる場所

今回は、長屋をリノベーションし“夢”だったカフェを経営する橋詰さん。建物自体は「店舗付き住宅」として、オーナーとシェアする形態。1階を橋詰さんの店舗、2階をオーナーの住居としています。昼間時間帯にお店を営業することで、夜寝るだけの空間になりがちな家に風を通すことができる。さらに、費用面でも両者にメリットがあると選んだのがこのカタチ。お互いの望みが叶えられた理想的・合理的な選択です。

元々の物件は築50年超えの長屋で、かつて工務店事務所だったもの。台所等の水回りを中心部に移したほかは、入口や窓も原型をほぼそのまま活用していると聞きますが、事務所だった面影は感じません。

店内は、木材の持つ天然の柔らかい質感を存分に活かし、“温もり”が溢れます。木材のダークブラウンを基調に、差し色の赤い小物と味のある骨董が並びます。入ってすぐ出迎える“座敷席”は、カフェというより帰省したような“くつろぎ”があります。



▲ 桃谷駅からすぐの裏道に佇む「和カフェ」。付近は人通りが多いものの、駅前の雑踏とは異なり、ゆっくりとした時間が流れる空間。下町のほのぼのとした空気に溶け込むように橋詰さんのお店はあります。長屋の1階部分を借り受け、カフェとしてはもちろん地域コミュニティの場として利用されています。

「生野区には以前から住んでいましたが、お店を始めて新しい地域で新しい出会いがあった。人情味溢れるところも、下町情緒たっぷりの街並みも素敵」嬉しそうに話してくれる橋詰さんは、お店の切り盛りを一人でこなし、地域活動にも積極的。その活力源は強い思いからのよう。

「カフェという場は、リフレッシュ空間や飲食物の提供だけでなく、地域に貢献できるコミュニケーションスペースであることが重要だと思う。」地域の方と繋がれる、ここに来れば誰かと話ができる、そういう空間を大切にしたい。

私自身が、友達と過ごす時間や楽しい事・綺麗な物に触れる時間で満たされるように、お客さまにも満たされる何かを提供したいと思っています

“誰かに何かを提供したい”そんな優しさが根底にあるからか、橋詰さんの居る空間は、心が安らぎ“ありのまま”で居れる懐かしい場所でした。



2018年  
8月号

## 人の可能性を広げる家

第4回目のお住まいは、事務所兼自宅として長屋をリノベーションされている橋爪さん宅。1階の改築は専門家に依頼しながら、解体作業など出来ることはご自身でされたそう。当時の仕事の関係で引っ越してきた生野区。偶然移り住んだ場所だそうですが、まちの活性に積極的に関わってこられました。“生野区空き家活用プロジェクト”の名付け親で、その一員としてリードしてきた橋爪さん。プロジェクトを前に進めるため、“実験台”として名乗りを上げ、空き家を購入。“第1号”として出来上がったのが現在のご自宅。

お住まいには、玄関と別の場所に設けられたもう一つの入口があります。入るとすぐに土間が広がり、腰かけるのに丁度良い上がり框（かまち）が出迎えます。



▲ 勝山北地区にある橋爪さんのお住まい。裏路地に面したお家は、勝山通りからほど近い場所ですがゆったりとした時間が流れる静かな空間です。

事務所をメインとして、家族・友人が集うプライベート空間、さらには地域活動やワークショップの開催場所、といった具合にさまざまな顔を持ち、多くの人が集うこの場所。

生野区内で“まちのえんがわ”の名で、会社の一角をコミュニケーションスペースとして開放されている先例にならない「“まちのえんがわ”橋爪事務所」と名付けられています。「家に事務所を作って、そこをいろんな顔を持つ場所にする。そんな暮らしがしたいと思っていたので、この場所はお気に入り。」と話す橋爪さん。

「こんな暮らしがしたい」と思ったことが多くの人に助けられて形になり、今の場所ができた。この場所がまた、叶えたい夢のある人を引き寄せ、その人の可能性を広げる場所になっている。」という言葉からは、出会いを大切にする人柄が溢れていました。

